

eラーニングを活用した大学入門講座の検証 — 明治大学の事例から —

Verification of Pre-Entrance Education Using e-Learning - A case of Meiji University -

宮原 俊之^{*1}
Toshiyuki MIYAHARA^{*1}
^{*1} 明治大学
^{*1} Meiji University

あらまし：近年，高等教育において，入学前教育やリメディアル教育の必要性・重要性は増している。特に特別入試合格者は，合格から入学までに時間があり，その期間の過ごし方が非常に重要になっている。本論文では，明治大学においてスポーツ特別入試合格者を対象に実施した「eラーニングを活用した大学入門講座」の結果をとおして，基礎学力向上に効果があることを明らかにする。また，eラーニングへの適応についても確認した。

キーワード：大学入学前教育，リメディアル教育，eラーニング，インストラクショナルデザイン

1. はじめに

近年，大学生の学力低下が問題になっているが，その理由の一つに新入生の基礎学力の低下があげられる。特に，特別入試（AO入試）による合格者は，合格が決まってから入学までに時間があり，その期間の過ごし方が重要である。そのため，多くの大学において，入学前教育やリメディアル教育に力を入れ始めている。

本論文では，明治大学が2011年度（2012年度入学予定者）に実施したスポーツ特別入試合格者を対象としたeラーニングを活用した大学入門講座について，収集した情報を分析し，基礎学力向上への効果や，学習支援の必要性などについて検討する。今回，スポーツ特別入試合格者を対象としたのは，大学入学後，数多くの遠征などにより学業に専念しづらく，基礎学力がない場合，大学の講義についていくことが困難になりやすいケースが多々あること，また，今後，これらの学習者は，eラーニングによる授業を多く受講することが予測され，その学習スタイルに慣れておくチャンスともなることからである。加えて，eラーニングという教育方法への適応効果について確認できることも期待した。効果によっては，対象者の拡大も考えているためである。

2 実施内容

2.1 対象者と実施方法

実施科目は，英語と国語の2教科である。

対象者は，明治大学にある9学部のうち農学部を除く8学部に入学を予定しているスポーツ特別入試合格者231名となった（政治経済学部は，英語のみの参加のため国語の対象者は，157名）。

また，実施にあたっては，一部の参加学部より，「受講強制はしない」という要望が出たことを受けて，学習支

援については，学習者からの質問および問い合わせへの対応と学部への受講状況の中間報告のみとなった。

2.2 教材

教材は，NHK高校講座の映像および音声編集し活用した。同講座の映像や音声自体は，同講座のホームページに公開されており，その内容は，非常にわかりやすく興味を引くものであるが，ただそれを視聴するだけでは，学習者の基礎知識定着にはつながらない。そこで，インストラクショナルデザインの考え方を取り入れ同講座の一部を活用して教材を組み上げた。英語は，同講座のドラマを活用した英会話分野7回と文法分野8回からなり，国語はラジオ講座を活用し，「ことば」を考える内容の7回からなる。英語は，同年代が出演するドラマを活用し，国語は，携帯電話のカメラ機能を使った課題を出すなど，学習の継続を促す工夫を施した。なお，教材のレベルは「難・中・易」と3つに分類した場合の「易」とし，底上げを図ることを目標とした。また，学習支援を行わないため，継続的に自己学習を進めることができる必要がある。加えて，評価というプレッシャーを与えすぎることのないよう注意し，各回の練習問題は，自分ですぐに判定ができ，ヒント・解説を確認できるようにし，点数化は行わないものとした。テストという意味では，第1回前の事前チェックテストと全学習終了後の事後チェックテストのみである。このチェックテストは，事前も事後も同じ問題とした。

3 結果と評価

3.1 評価方法

評価は，インストラクショナルデザインを強く意識しつつも，教育におけるプロセスを評価する形で設定され

ている R.M ガニエらによる教育システム評価⁽¹⁾の手法を用いた。評価に必要な情報としては、受講者アンケート(各回の終わりと、科目の最後に用意)と、各科目のチェックテストの結果とした。これは、それぞれの結果が、学習者の満足度と実際の理解度という学習効果を図るために必要な要素と考えられるからである。

アンケートの質問項目は、究極の質問⁽²⁾ (「この科目の受講を自分の信頼する人(友人等)に勧めますか?」を10点満点で問うもの)を中心に据え、授業評価の3ポイント⁽³⁾: (1)授業方法(授業そのもの)、(2)学習者が何を学んだか(学びたいことが学べたか)、(3)学習者がその科目を好きになってくれたか(学問への興味) —などを加えた。また、先述のとおり今回の実施にあたっては学習支援についてほとんど行わなかったが、eラーニングを活用した教育活動を効率的に実施するためには支援組織体制が必要である⁽⁴⁾ことから、このことについてもアンケートの質問項目に設定した。

3.2 評価

図1に科目最終アンケートの究極の質問の結果を示す。ここで示しているNPS(Net Promoter Score)とは、推奨値(10, 9点)の割合から批判者(6点以下)の割合を引いたものである。英語、国語ともにNPS値は正の数値となり、満足度はかなり高い。また、表1のチェックテストの結果からは、7割程度の学習者が、事前テストよりも事後テストが高くなったことがわかったほか、事前テストが50%の正答率に満たない学習者の点数の伸びが大きことが確認できた。これらから、最後まで学習を続けられた学習者に対する本講座の学習効果(特に底上げ)が示唆された。

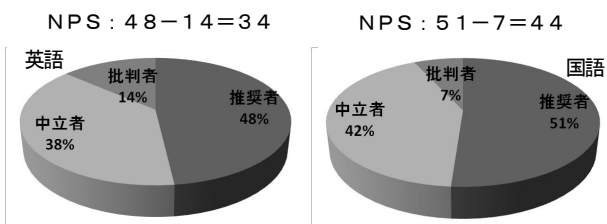


図1 究極の質問

表1 チェックテスト結果

項目	英語(18問)	国語(8問)
事前チェックテスト受験者数	169	115
事後チェックテスト受験者数	82	42
平均正答数(事前チェックテスト)	11.4	6.2
平均正答数(事後チェックテスト)	14.4	6.9
事前チェックテストの正答数が半分以下だった学習者の平均(事後チェックテストも受けた学習者のみ)	7.2	3.7
事前チェックテストの正答数が半分以下だった学習者の事後チェックテストの平均	13.2	6.3
得点が「事前<事後」となった人数	63 (76.8%)	26 (61.9%)
得点が「事前<=事後」となった人数	67	37

※複数回受験の場合は、1回目の得点を選択。国語は、チェックテスト1(知識問題)のみ集計

一方で、受講状況は芳しくなかった。最後まで学習を終えることができたのは、英語が35%程度、国語が27%程度であった。この点について、最終アンケートの「サポートが必要か」という問いに、60%以上の学習者が必要と答えている。その理由は、勉強方法への不安や、理解を深めるためには必要といったものであり、最後までに学習を終えることができた学習者からも学習を継続するためにはサポートが必要という意見が聞かれ、その必要性が浮き彫りとなった。

4 まとめと今後の課題

今回の結果から、eラーニングを活用した大学入門講座が、基礎学力の向上につながることは示された。また、もう一つの目的であった「eラーニング」という学習方法に慣れてもらう点についても、「初めてで最初はとまどったがだんだん慣れてきた」というコメントが多く、その効果を確認することができた。ただし、いずれの場合も、最後まで学習を終えることが前提となっており、修了率の向上が今後の課題となる。学部の理解が得られれば、メディア授業で取り入れ効果をあげている支援組織体制モデル「大学eラーニングマネジメントモデル⁽⁴⁾」の活用を考えているが、運動部によっては入学前から合宿所に入る場合もあり、その場合の学習デバイスおよびインフラの確保も検討をしなければならぬ。これが、強制に踏み切れない理由ともなっている。

また、各回のアンケートから、評価の低い回も見つかった。この点については、学習者の苦手分野と判断する前に、教材の見直しをまず行う。

対象者の拡大にあたっては、教材レベルの充実も必要であり、支援体制などの整備も含めるとコスト増が見込まれる。これらの課題解決のために継続的な取り組みを進め、効果的な大学入門講座のモデルを作り上げていく。

参考文献

- (1) R. Mガニエ, W. Wウェイジャー, K. C. ゴラス・J. M. ケラー著, 鈴木克明・岩崎信監訳: “インストラクショナルデザインの原理”, 北大路書房(2007)
- (2) フレッド・ライクヘルド, 堀新太郎監訳: “顧客ロイヤルティを知る「究極の質問」”, ランダムハウス講談社(2006)
- (3) Robert Reiser: “Effective Teaching:How to Plan and Present It:One Professor’s Opinions”, リーサー教授大阪講演(2007)
- (4) 宮原俊之, 鈴木克明, 阪井和男, 大森不二雄: “高等教育機関におけるeラーニングを活用した教育活動を支える組織支援体制「大学eラーニングマネジメント(UeLM)モデル」の提案”, 教育システム情報学会誌, 27(No. 2), pp. 187-198 (2010)